

緑内障と近視

THEMA 1

第I章 はじめに

① 緑内障と近視の微妙な関係：現在の論点

岐阜大学大学院医学系研究科眼科学 教授 山本 哲也



はじめに

今回から4回シリーズで、緑内障と近視に関するいくつかの論点を呈示し、専門家に論じていただくことにした。本稿はその序として緑内障と近視の関連を総論的に記述する。

緑内障と近視に関しては古くから、近視眼における緑内障診断の困難さや近視眼と非近視眼における緑内障性視野異常の出現パターンの相違などにより一定の関心を呼んできた。それが今日新しい視点からさらに注目を浴びる状況になっている。今日我々の目のあたりにする緑内障と近視の関連についての主な論点は“近視眼における緑内障性視神経症の表現型とそれを踏まえた臨床的対応のあり方”とでもまとめられる従来よりも明確でかつ根源的な命題である。これは現代テクノロジーの進歩、特にSD-OCT, SS-OCTの登場による必然的な動きであり、その場に居合わせている我々はその分だけ幸福であると感じる。

緑内障性視神経症と近視性視神経症

第一の論点は近視眼に出現する緑内障性視神経症は緑内障性視神経症だけで説明できるのかということである。

従来から近視眼における緑内障は通常の緑内障とは少し異なる特殊な状態のものとされ、各種画像解析装置を用いた緑内障眼の視神経乳頭や網膜の解析においても対象眼を屈折値で限定するという形で近視(特に強度近視)を除外してきた。このことは緑内障の本態を知るという一般の研究目的には敵ったものであるが、中等度近視眼、強度近視眼の緑内障が屈折異常の少ない症例の延長線上にあるものなのか、それともそれから外れたものなのかという疑問には答えられないでいた。

一方で、強度近視の研究から緑内障を有しない強度近視眼の網膜や視神経乳頭、および脈絡膜、強膜におけるいくつかの構造異常の存在が明確に画像として捉えられ、病態解釈が進みつつある。緑内障研究にとって重要なこととして強度近視眼にみられるこうした形態変化の一部に、緑内障と類似したもの、また進行性のものがあることを指摘することができる。

となると、近視眼の緑内障は本当に緑内障性の視神経症であるのかという疑問が生じ、また、現在の我々の知識と技術では緑内障性視神経症と近視性の視神経障害を鑑別できていないのではないかという疑念を生むことになる。こうした点は緑内障にとって極めて本質的で興味深い。

緑内障と近視：OCT所見

第二の論点は第一の論点とも関係するが、近年普及の著しいOCTを用いて近視眼緑内障をどのように捉えることができるかという点である。OCT所見は個々の症例における視神経形態変化を知る優れた指標となるばかりでなく、研究面では緑内障性視神経症、すなわち緑内障の本質に迫るものとして注目される。スペクトラルドメイン(SD)-OCTで飛躍的に伸びた我々の知識がスウェプトソース(SS)-OCTの導入によりさらに微細構造変化を捉えるまでになっている現状に鑑み、実臨床と研究の両面から、現在どこまででき、今後どうなるのかを探求していきたいと考える。

本特集では視神経と網膜とを恣意的に分け、近視眼緑内障に対する後眼部OCTの実臨床における利用と研究応用について述べていただく予定である。